

赤面のいたり

嶺井正也

<その1>

先日のことであった。来客があるので、おもてなしの刺身を買いに自転車で出かけた。目指すは、近頃めっきりお店が減り、活気がなくなったある商店街にある魚屋。商店街の真ん中にある道路は狭い。でも、人通りが少なくなっているので自転車で往来はそれなりにある。

急いでいたこともあり、老夫婦で頑張っている魚屋にむけ自転車をこいでいた。ちょうど中ほどに差し掛かった時、横丁から一人の女の子が飛び出してきた。もちろん、とっさに急ブレーキ。年齢が高くなっているとはいえ、なんとかかぶつからずに済む動作はできた。

ホッとしながら、その子に「急に飛び出さないでね、危ないよ」と声をかけた。すると、後から歩いてきていたお姉さんらしき一人の女の子が、私に「大丈夫ですか？」と声をかけてくれたのだ。年恰好からすると小学校3年生くらいだったろうか。

その声を聞いてから、私は飛び出してきた妹らしき女の子に「大丈夫だった？」と声をかけたのだった。そして、急いでいたこともあり、このとっさの出来事について、「ぶつからずに良かった」と思っただけで、買い物を済ませ、帰宅した。

客が帰ってからのことである。急にこの場面が浮かんで来て、赤面してしまった。こちらから先に「大丈夫？」と言わずに、女の子から先に言われたこの場面。それと同時に、人を思いやる心のある小学生の存在に感心しきりであった。

<その2>

これも先日のこと。1978年に亡くなられた持田栄一先生にちなんだ集まりがあるからの連絡を受けて第二部の懇談会に参加。それは先生の蔵書を持田文庫として保管していたお寺が諸般の事情で文庫を閉じることにした、合わせて奥様とご長男を交えて関係者による歓談会をもちたい、ということであった。大学院の先輩である故岡村達雄さんにつれられて持田先生が主宰されていた「教育計画会議」の末席を汚していただけではあったが、奥様がいらっしゃるということだったので出席した。

江戸川区の瑞江駅近くの小さなフレンチレストランでの懇談会。参加者から持田先生にかかわる思い出やエピソードが披露された。なんと「新しい歴史教科書をつくる会」の代表をしたこともある杉原誠四郎さんがいる一方で、「現代の理論」の創始者である安藤紀典さんやその雑誌の中心的書き手である池田祥子さんがいる集まりのなか、最後に奥様がお話をされた。

なんとなんと、奥様は最後に、この私めに「歌を歌って欲しい、できればロシア民謡を」所望されたのであった。こんな場面が頭に浮かばなかったわけではない。というのも、毎

年いただく年賀状に「歌をお聞きしたい」との一文がいつも添えられていたので、何か機会があればそんなことになるかなあ、とは思っていたからである。でも、まさか、と思い、準備はまったくしていなかった。

実は持田先生がご存命の頃、誕生日の1月5日、ご自宅で新年会をされ、大学院生を集め、御馳走されていた時、東大大学院生ではない私も何度か伺ったことがあった。その新年会は後半になると歌合戦になり、私が歌うのを奥様が聞いてくださっていた。なぜだか、演歌的な歌い方しかできない私の歌を気にいってくださっていた。

母より1歳お若い、その奥様からの要望をもはやお断りする勇気はなかった。小さなお店、皆様の前で、私はアカペラで歌ったのであるが、緊張と酔いのせいで、音程は狂うし、歌詞は忘れて出てこないという失態を演じたのであった。思いだすほどに赤面してしまう。